



私の一冊

2015年第50巻12号

「胃底腺型胃癌」

順天堂大学大学院医学研究科人体病理病態学

八尾 隆史

これまで本誌への執筆および編集に長年かわり、多くの新知見を発信することができたと思う。また、筆者が直接かわっていない号からも多くのことを学ばせていただいた。それらの中から“私の一冊”を挙げろと言われても無理であり、これまでこの欄の執筆を避けていた。しかし、遂にこれぞ“私の一冊”が現れた、それは「胃底腺型胃癌」である。

胃底腺型胃癌は、2005年ころから遭遇するようになり、その後10症例の蓄積により、新しい疾患概念として成立することを確信したため、2010年に順天堂大学消化器内科から大学院生として筆者の下にやってきた上山浩也が論文としてまとめ、新しい組織型として世に発表することができた(Am J Surg Pathol 34:609-619, 2010)。

胃底腺型胃癌という新しい疾患概念の提唱ができたことだけでも有意義であったが、その後この病変の多くは*H. pylori*陰性であることが判明した。今後*H. pylori*陰性時代を迎えるにあたり注目度が高くなったことでより大きな意義を見出した。そして、本誌の特集「低異型度分化型胃癌の診断」(45巻7号, 2010)において、「新しいタイプの胃癌—胃底

腺型胃癌—臨床病理学的特徴と発育進展様式および悪性度」というタイトルで筆者らが胃底腺型胃癌の27病変を日本語で紹介したことが、その後全国の各施設で胃底腺型胃癌が多数発見されるきっかけとなったと思われる。しかしながら、その後の症例の集積により胃底腺(主細胞と壁細胞)への分化のみならず腺窩上皮や幽門腺への分化を伴うものや、細胞増殖活性が高いもの、脈管侵襲やリンパ節転移を伴うものがみられるようになり、胃底腺型胃癌の分類を再考する必要性が出てきた。

「胃底腺型胃癌」の特集では、胃底腺型の臨床病理学的特徴が複数の施設から提示され、遺伝子異常の一部も紹介された。胃底腺型胃癌の全体像を把握できることに加え、その発見の経緯から細胞学的特徴、再分類の必要性も述べられ、今後の*H. pylori*陰性時代における胃癌診療において知っておくべき内容となっている。本号を編集したものとして手前味噌ではあるが、今後の診療に必ず有益となる号と確信しており、私の一冊として皆さまにお勧めする。